

フィヒテ著『フリードリヒ・ニコライの
生涯と奇妙な意見』（1801年）(3)

勝 西 良 典

解題

以下に訳出するのは、ヨーハン・ゴトリープ・フィヒテ著、A・W・シュレーゲル編『フリードリヒ・ニコライの生涯と奇妙な意見。前世紀の文学史ならびに幕開けしたばかりの今世紀の教育学に関する論考』（*Friedrich Nicolai's Leben und Sonderbare Meinungen. Ein Beitrag zur Litterargeschichte des Vergangenen und zur Pädagogik des angehenden Jahrhunderts*, 1801）の第6章から第7章である。底本には、アカデミー版全集（*J. G. Fichte — Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, Reihe I, Bd. 7, hrsg. von Hans Gliwitzky und Reinhard Lauth, Stuttgart 1988.以降, GA I/7 と略記）所収のテキストを用いた。訳文中の〔 〕は訳者による補足であり、訳文の欄外の数字はこの版のおおよその頁付けを示している。また、原注は章末に、訳注は脚注として示している。

ここで前回（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第18号、2019年3月、61-86頁）の誤植を以下のように訂正させていただきたい。

- ・ 69頁4行目 〔誤〕…嘲笑の的… → 〔正〕…あざけりの的…
- ・ 74頁14行目 〔誤〕…笑止千万という殺し文句…
→ 〔正〕…嘲笑という武器…
- ・ 83頁、訳注57 〔誤〕訳注52… → 〔正〕訳注53…

- ・ 84-85 頁， 訳注 59
 - ・ 84 頁最終行の「ある。」に 85 頁行頭の「『ドイツ百科叢書』…」を続ける。[改行をなくす。]
 - ・ 85 頁 2 行目 誤 …訳注 59… → 正 …訳注 60…

訳文

393 第 6 章 かの最高原則に基づくところの、我らが主人公の きわめて奇妙な意見のひとつ

我らが主人公の本性である根源的な無能ぶりないしは初期のゆがんだ教育にどんな理由があったにせよ、手短に言うと、彼の最大の崇拜者や最も温かい友人の間でこの点について唯一挙がっていた声は、彼は哲学にはまったく向いていないというものだった。彼の精神は味も素っ気もない年代順の精神であった。彼には断じてなかった能力とは、経験を超えて、詳しく言うと、きわめてレベルの低い語彙における経験、すなわち、感覚的印象をただたんに相互に結びつけてそれについて語ることを超えて、現象が現に従っていたり従っているはずの普遍的法則の概念、つまり、すべての哲学の質料的なものにまで自己を高める能力であった。だが、私が法則の概念について語っていることの中身は一体何だというのか。前提命題の概念にまですら自己を高めるすべを心得ていなかったのが彼である。そんな彼が、哲学の形式的なものについて、すなわち、哲学的探究における思考内容の間の連関、思考内容がその位置づけから獲得する価値と規定、思考の有機的全体について、ほんのかすかな予感めいた漠然とした理解でもいいからいつかは知るなどということが、どのようにすれば起こりうるのか。彼が言葉にした可能的な思考内容はいずれも直接的に確実に自明なものとして語られていた。彼がそうした可能的思考内容を口にしたからとか、彼がそれを口にした方法がどうこうといった問題とは関係なく、私たちはそうした思考内容に適切な位置づけを与える。これらの、同じように直接的に確実な思考内容をすべて、彼はとにかく、それらが念頭に浮かぶままに、ある可能的なものを別の可能的なものに各々結びつけるといったかたちでひとつに組み上げた。

このようにして、彼にとっては、あらゆる人間的思考がひとつの大きな砂の山^{訳注1}に姿を変えてしまったのである。そこにおいては小さな粒はいずれも独立しており、すべての粒がごちゃ混ぜになっているが、ひとつひとつは何の変化も被ることがないなどということがありうるのである。このようなやり方をしている証拠については、ずっと後の方で挙げることにしよう。

なるほど、ある特定の問題についてまったく無能な者に対してそのような自分の無能ぶりを認識しろと要求するのは不当なことである。なぜなら、まさにその人を問題に対して無能にしているのと同じのものによって、その人は、問題に対する自分の能力を評価することもできなくなっているからである。しかしながら、普通の人間の場合には、あいまいな感情が明晰な判断を下すに当たってその人間に足りないものの埋め合わせをしてくれるものである。だからここで話題にしている分野にかんしては、人々が、形而上学の教授でも『ドイツ百科叢書』(*Allgemeine deutsche Bibliothek*)の哲学関連の書評者でもない立場で生計を立てて 394
行けさえすればよいといった場合に、形而上学にはまったく苦勞させられるとか、これにかんしては今までどうしてもあまり理解できなくてねえと打ち明けたり、あるいは、もっとうぬぼれが強い場合には、これらは頭が痛くなる話だが中身のない屁理屈だと、お気に召さないだけなのにそう告白したりするのを聞くことは、珍しいことでも何でもない。——さらに言うと、なるほど人はだれにでも親しい知り合いか友人がだれかしらはいるものである。ニコライの同時代の人のなかには、哲学にかんする善し悪しの判断もお手の物とする人たちが非常にたくさんいた。なのに、そういう人たちのうちのだれひとりとして、我らが主人公に対して遠慮の限りを尽くしたために、なるほど人間の感覚の鋭さによる別の仕事、すなわち、イエズス会士たちの緻密な策謀をかぎついたり聖職者のカラーや鬘の珍しいタイプを突き止める能力^{訳注2}において彼に並ぶも

訳注1 砂遊びで作る砂の山のこと。

訳注2 ニコライ『古代及び現代における鬘の使用について——歴史的探究——』(*Über den Gebrauch der falschen Haare und Perrücken in alten und neuern Zeiten. Eine historische Untersuchung*, Berlin und Stettin 1801) 参照。

のはいないが、本来的な意味でいわゆる高次の哲学と呼ばれるものにおいて同じ強みを彼が持っているわけではないことを理解させることが一度もできなかったというのだろうか。カントは、我らが主人公もやはり極度の感覚の鋭さを持っていると認めざるを得なかった人物であるが、そんなカントは彼のことを信頼して、彼ならおそらく高次の思弁の諸対象について判断することを自分から控えるだろうと決めてかかっていたのではないだろうか^{訳注3}。

我らが主人公は何をしたのだろうか。たとえば、あのあいまいな感情の警告を受けて、自分の本性によって自分に閉ざされた分野を最初からすぐに諦めたのだろうか、それとも、あの警告に耳を傾け、その分野にかかわることを後になって断念したのだろうか。

どうして彼にできたのだろうか。一体全体哲学は人間的知識の範囲に属するものではないのか、それどころか、哲学は昔からこうした人間的知識を所有するすべてのものによってこうした知識の最高峰にさえ位置づけられてきたのではないのか。この叢書は昔から哲学の分野もカバーしていたのではないのか^{訳注4}。この叢書の編集者であり、したがってこの叢書の魂であり、したがってあらゆる精神教育の魂である人物が、だからこそ、あらゆる哲学者のなかで最も嘘偽りがなく最も包括的な知見を持つ第一の哲学者であるというわけではないなどということが可能だったというのか。彼が老人カントに対する慇懃無礼なふるまいとしてできた最高のことは、彼の哲学修行時代にかんする史的報告を行ったことであった^{訳注5}。しかしながら、我らが主人公の能力にかんしてあのような

訳注 3 カント『本屋稼業について。フリードリヒ・ニコライ氏宛の二通の書簡』(Ueber die Buchmacherey. Zwey Briefe an Herrn Friedrich Nicolai, Königsberg 1798), 16頁 (Kant's gesammelte Schriften, Bd. VIII, hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Berlin 1912, S. 436) 参照。「出版者は、自分の出版書店を活況にするために自分の扱う出版物の内容や価値について考慮に入れる必要は別にありません」。

訳注 4 哲学関連の著作の書評は、『ドイツ百科叢書』では「世界知」(Weltweisheit)の項目に掲載されていた。Vgl. GA I/7, S. 394 Anm. 3.

訳注 5 ニコライ『私の勉学修行時代、批判哲学にかんする私の知識と著作、及びカント、J・B・エアハルト、フィヒテの各氏について』(1799)のこと。

疑念の声を上げることは可能だったのである。このことから、この分野における深く進行した退廃とすさまじい荒廃が最も判明に示されるとともに、これからはこの分野の復旧に彼のすべての力を捧げることが彼の最も重大な義務となったのだ。

ここでもそうだし、いたるところでそうなのだが、我らが主人公は、395
「私、フリードリヒ・ニコライは君たちとは意見が異なる。君たちもここから見れば、自分たちが正しくないことがわかる」という原理から出発した。彼はこのような、自分の思弁システムの最高原則を何度か口にしたことがあった。普段は体系的な進め方というよりはむしろ叙事詩調の進め方に立っていたのだが。ああした発言から少なくともいくつか引っ張ってくることは主人公の過去の物語を紐解くことにはなる。

ヤコービが述べていたことによれば、これにはレッシングとの会談による裏付けがあるのだが、レッシングは高次の思弁においてはスピノザの原理を好んでいた^{訳注6}。ヤコービのそのような話はきっと、——友人たち、ないしは故人の名誉回復を望む人たちはそう思いたかったわけだが——真実ではなかっただろう。レッシングはニコライやメンデルスゾーンといった方向の、健全で穏健な概念から外れていなかったはずだ。我らが主人公もヤコービに対する反論となる証拠を呈示した。それで、彼が呈示した証左はどんなものだったのか。——彼、ニコライは何と、これ以上ない仕方^で確然と、ヤコービは絶対レッシングのことを誤解したのだと言いつけることができるのだ。それというのも、彼には「当の彼が自分でレッシングとともにそのテーマで学術論文を書いたのだ」と言えるわけなのだから^{原注(1)}。そんなわけで、もちろんのこと、ヤコービは十分に恥ずかしい思いをした。こんなものが証だとしてなお彼の言葉を傾聴したなどという読者はどちらにいらっしゃるのだろうか。また彼は、自己自身の眼前で魂の内奥まで真っ赤になることもなく、どんな申し立てを行ったのだろうか。——彼はすでに言及した有名な文書において、同じふう^にこんな懸念を表明していた。当然のことながら、おそらく別の

訳注 6 ニコライ『モーゼス・メンデルスゾーン氏宛書簡にしたためたスピノザの教説について』（*Ueber die Lehre des Spinoza in Briefen an den Herrn Moses Mendelssohn*, Breslau 1785）、11頁以下参照。

定方式によりニコライによって一緒に見極められることのなかったもの——ヤコービ、カントならびに超越論的観念論者たちが唱える哲学上の諸学説——こういったものが誤っているかどうかについてどんな疑問があるというのか。それらは他にどんな仕方で見極めることができたというのか。——もちろん、それらが真理であるなんてことがあろうものなら、ニコライがそれらをもっと早く、これらの人間のすべてから何かを耳にする前に発見していなければならなかったことだろうというかたちで見極めることができたのである。そしてそれらが誤っていた場合には、それはわかりきったことで、我らが主人公は彼の不変の闘争計画に従って、嘲笑という武器でもっていても簡単にそうした諸学説を斥けて進まなければならなかったのだ。

カントは、自分の体系を完成させて有名になったときにはすでに高齢で、この功績は我らが主人公が脂ののった年齢のときにかんりの影響を与えた。またもしかすると、周知のように教養形成の非常にさまざまな段階を経てきた、かの哲学者は、これらのうちの初期のある段階での叢書のメンバーの似而非啓蒙主義のことを多少気に入る、そのことを言葉にしたのかも知れない。そういったわけで、カントは（どのような点において彼がニコライの根本原理を認めているように思われるにせよ）その他の点では理性的で学識のある人間だったのであり、こうしたカントがニコライには発見できなかった諸命題を真なるものだと主張できたことはそれだけに一層ますます感嘆すべきことであった。嘲笑の一撃をカントに見舞わせることは当然ながらできなかったのであり、むしろ、まさにカントがその他の点では理性的な人間で、そうした人間についてはいずれ改善されることがとりわけ期待できたがゆえに、こうした一撃は可能であるならば研ぎ澄まされねばならなかったのである。

物書きとして世に出たときのヤコービは、超越論的観念論者たちもそうだが、ニコライより若かった。それで、若者の成長に配慮して、我らが主人公は、彼らが脂ののりきった年齢になったときに彼らを成長させたことで名誉に浴し、喜びを味わうために、彼らのことをきつく譴責するという格率を採用していた。というわけで、ヤコービは、議論においておおよそ耳にしたこと、ないしは中途半端に耳にしたことを全部印刷させて偉ぶっている、あのありきたりの頭脳の持ち主のひとりであり、

397 自分のテーマをまともにじっくり検討したことがまったくなく、一度も執筆することができなかつた人間であつた^{原注(3) 訳注8}。超越論的觀念論者たちはひねくれ者であり、彼らがそもそも何ものだつたのか依然としてだれにもわからないのである。

そういうわけで、我らが主人公が最期を迎えるまでだれひとりとして主人公から至福の確信を奪うことはなかつた。先に言及した砂の山を揺さぶることのうちに真に哲学することの本質があるということ、こうしたことを彼より上手くできるものはないということ、したがって、彼はただだんにあらゆる時代の中で第一の哲学者であるばかりでなく、同時に強力な哲学の闘士でもあるということは、彼の中では揺らぐことがなかつたのである。彼は晩年一層頻繁に、彼はこの分野のことは何も理解していないし、この分野についての発言権は一番少ないと、声を大にして告げられていたが、この呼びかけの言葉は彼の役に立つものだつた。彼の内的な確信からすれば無論余計なものだが、この言葉は彼からすれば、彼のあの意見がみなに承認されていることを示す外的な証拠、すなわち、彼が哲学的に優れているという意見はだれもがこころの中では認めていることを示す証拠だつたのだ。というのも、彼はひとりぶつつき

訳注 8 『フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ、スピノザの教説についての書簡にかんするメンデルスゾーンの非難に抗す』(Friedrich Heinrich Jacobi wider Mendelssohns Beschuldigungen betreffend die Briefe über die Lehre des Spinoza, Leipzig 1786), 123-124 頁参照。「確かに、私の書いたものを吟味しさえすれば、私が私の題材にけつて太刀打ちできていないこと、私が私の題材をけつてじっくり研究せず、その源泉をけつて究明しなかつたこと、ましてやその題材に属するものを自分のことのようによく知つてなどいないことが、たちどころにわかる。私は確かに一度たりともきちんとした読書ができたためしがない。それはそうだろう。私がきちんとした読書をするすべや、ましてや、きちんと問題を取り扱いじっくり検討するすべを心得ていたとすれば、私が正しい信仰を持っていて、真正の教会に帰属していることを告白しているなどということが当たり前のことにならなくなつてしまわないだろうか。—それから、執筆することはどうだろうか。なるほど私は美辭麗句を紡ぐことはできる。しかしながら、執筆することはどうだろうか。神よ、私たちがそのようなことを披露しなくて済むようにお守りください！ 私はそういった現状なのである」(傍点大文字)。Vgl. GA I/7, S. 396 Anm. 13.

こう言っていたからである。「彼らが私の挙げる論拠に対抗して何らかの成果を上げることが希望できるのだとすれば、彼らはなるほどこうした論拠を打ち破ろうと努力することだろう。しかしながら、これらの論拠をただたんに注視していても彼らは絶望するだけなので（状況は無論そのとおりであった）、彼らに残された道はただひとつ、鶴の一声を発し、私はその問題について何も理解していないと言うことだけなのだ。しかしながら、このことが私に対して立証しているのは、私だけがその問題を理解しているのだと彼らがおそらく認めているということである」。

原注

- (1) 『ヤコービ、メンデルスゾーンの非難に抗す』（ライプツィヒ：ゲッセン、1786年。相も変わらずありふれた内容の著作）、99頁参照。そこでヤコービは『ドイツ百科叢書』第65巻第2号、630頁を引用している^{訳注9}。「まさに同じことをそれらの弾劾は証明している。すなわち、ヤコービは執筆できず、その題材はけっして強烈なインパクトを持たず、云々」。
- (2) しばしば言及されている『新ドイツ叢書』掲載紹介書評の167頁を参照^{訳注10}。

^{訳注9} ヤコービ『スピノザの教説についての書簡にかんするメンデルスゾーンの非難に抗す』、99-100頁の注。「とにかく本当に、はなはだしく卑劣なことで私を苦しめないでくれさえすればいいものを！ そいつがこれだ。『ニコライ氏はこれ以上ない仕方と確然と、私が絶対レッシングのことを誤解したのだ、と言い切ることができる』んだそうだ。他の非常に近いレッシングの友人たちはというと、なるほど、あくまで私の聞き及んでいるところでは、公にはばかることなく真逆のことを証言している。しかしながら、証左、すなわち内的証拠ならびに外的証拠として言わんとされているのは次のことだけなのだ。ニコライ氏〔傍点大文字〕が『当の自分には言える』と言っているならば（これ以上ない仕方と確然と言い切ること、これがニコライ氏にはつねにできるのであり、けっして別の仕方と発言することはない）、『当の彼が自分で、あるテーマで学術論文を書いたのだ』と言っているのならば！」（傍点ゲシュペルト）。Vgl. GA I/7, S. 397 Anm. 6.

^{訳注10} 本書第2章の訳注21（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第18号、2019年3月、70-71頁）参照。

398 (3) 彼がみずから編集した、レッシングとラムラー、エシェンブルク、当の彼との往復書簡（当の彼による発行、1794年）の序文の中でニコライは、嘆息を漏らした後でこう言っている。メンデルスゾーンはレッシングの性格を描写したものを編集発行しなかった——この点については周知のように、これらレッシングの友人たちによれば、レッシングの真の思弁的体系にかんしてヤコービがしたためたものがメンデルスゾーンを阻んだというのである。「これは、ドイツで非常に一般化している逸話漁りが——ないしはむしろ噂話が（ドイツにはおやおやさか、周知の旅行書の著者よりも質の悪い、噂話が好きな輩がいたのだろうか）「引き起こした最初の損失ではない。ありきたりの頭脳の持ち主はだれしも議論においておおよそ耳にしたこと、——ないしは中途半端に耳にしたことをそっくりそのまま印刷させて——（ニコライが取る周知の実用的な方法だが）偉ぶっているのだから^{訳注11}」。ヤコービはまさに中途半端に耳にしただけなのだそうであ

訳注 11 『ゴトホルト・エフライム・レッシinger-カール・ヴィルヘルム・ラムラー、ヨーハン・ヨアヒム・エシェンブルク、フリードリヒ・ニコライ往復書簡——レッシinger-モーゼス・メンデルスゾーン往復書簡にかんする若干の注記を添えて——』（*Gotthold Ephraim Lessings Briefwechsel mit Karl Wilhelm Ramler, Johann Joachim Eschenburg und Friedrich Nicolai. Nebst einigen Anmerkungen über Lessings Briefwechsel mit Moses Mendelssohn*, Berlin und Stettin 1794）参照。その「序文」（„Vorrede“）、V-VII頁にこうある。「レッシingerの死後、私たち二人の友人であるモーゼス・メンデルスゾーンがレッシingerの性格にかんする小本を執筆しようとするに至った。執筆のために彼は私に、レッシingerが私に宛てた全書簡を請求し、私は彼に当然ながら喜んで渡した。彼はそれらに全部目を通し、私たちは何度もレッシingerについてどんな本を書いたらよいか話し合った。しかしながら、それにもかかわらず実現しないままになったのはさまざまな邪魔が入ったためであり、特に、『ゴータ学術新聞』（*Gothaische gelehrte Zeitungen*）に、モーゼスがそのような本を執筆中だというニュースが内偵者によって掲載されるなどといった不愉快なことがあり、それ以来、野次馬から絶えずその件で彼に問い合わせが来たり、一体どんな内容が盛り込まれるのかといった推測が飛び交ったりして煩わしくなったというのが大きかった。私たちの文学にとってモーゼスがこの本を執筆しなかったことは損失であり非常に重大なことであるが、それは、ドイツで非常に一般化している逸話漁り、ないしはむしろ噂話が引き起こした最初の損失ではない。ありきたりの頭

る。彼こそが、そのようなものを印刷させることによって、永遠の至福をもたらす唯一の哲学を非常に憤慨させたのである。彼はありきたりの頭脳の持ち主の中のこのようなひとりだったのだ。

哀れなものよ、汝がこのような一節を文書にしたときに、一体全体汝には悪魔の誘惑の予感がまったくなかったのか。一体全体汝にはこんな耳打ちをしてくれる友人が一人もいなかったのか。このありきたりの頭脳の持ち主であるフリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービの精神の力が1000人のニコライのあいだで均等に分け与えられたとすれば、これらのニコライのうちのだれもが、それでも依然として、汝、きわめてお粗末なフリードリヒ・ニコライよりもはるかに多くの名誉を浴した立派な姿で世間を闊歩していることだろう、と。

ではこの際なので、本書のいくつかの箇所のために以下にコメントをつけておく。ヤコービと私との間には顕著な意見の相違が生じていた^{訳注12}が、その主な理由は、私の見たところ、ヤコービが諸々の非常に本質的な点において私のことを十分に理解していなかったことにある。あるいは、落精度が私の表現にある場合には、彼がこれらの点について、私の思考においてそれらの点の由来する[それらの]連関にまで立ち入っ

脳の持ち主はだれしも議論においておおよそ耳にしたこと、ないしは中途半端にしか耳にしていないことをそっくりそのまま印刷させて偉ぶっているのだから」。この件について、メンデルスゾーンは『レッシングの友人たちに宛てて』(*An die Freunde Lessings*, Berlin 1786)の9頁で次のように言っている。「こういった部類のドイツの旅行客が記念帳をあちこちに見せて回っているのはご存じであろう。彼らが功績のある人のところに行ってはそれを見せたり尋ねたりし、あるいは、大急ぎでまたここかしこに行っては触れ回り、それどころか挙げ句の果てに公刊までしたりすることを。そういった輩は、私が思うに、もしかするとレッシングにかんする中途半端な理解を示す言葉を耳にしたり、あるいは、レッシングがそうした輩の記念帳にたとえばギリシアのモットー、「一にして全」を書いてやったりしたかも知れない。そして、逸話で小商いをする人間は即座にレッシングをスピノザ主義者にするのである」(傍点ゲシュペルト)。Vgl. GA I/7, S. 398 Anm. 9.

^{訳注 12} 『ヤコービのフィヒテ宛書簡』(*Jacobi an Fichte*, Hamburg 1799) 参照。

て思考していないことに理由があるが、私は思考するすべての人のためにできるだけ早く判明なかたちでそれらの点をその連関に置き入れて説明するであろう^{訳注13}——もしかするとそれらと並行して、ヤコービがニコライ主義と戦っている^{訳注14}中で、どんな敵対者とぶつかってもこのニコライ主義、すなわち、空虚で無意味なつまらない考えが敵対者の中に少なくとも少しは入っていると決めてかかることに慣れてしまっていたことも理由として挙げられるかも知れない。——さらに言っておこう。ヤコービの私に関する意見や、私が試みてきた説明がこれまでどのようなものであろうとも、また、私がこれらの表現に対してどのように対応する必要があると思っているにせよ、最後に、万一ヤコービが後に普遍的な人間の運命に従って老衰で落ちぶれ、そのこと自体に気づき、彼に警告を発してくれた友人たちも失い、公衆の前にかつての自分と似ても似つかぬ姿をさらすといったことが起こったとしても、私はこれらすべてのことに阻まれることなく、過去の彼のことを彼の時代の第一線の人物のひとりであり、真の徹底性の伝統に連なる数少ないメンバーのひとりであると、声を大にして承認するであろう。——私がそうするのはだれかある人の好意を我が物にするためではなく、それがふさわしいからである。人のことを大いに尊敬するのは、たまたま付き合いがあるからではなく、その人の功績を認識しているからである。そして、尊敬に値するものがあるといっても実のところそれほど尊敬されているわけではないので、そうしたもののことでさえ、しかもほんの小さな過失があっただけでもこき下ろしたり、おそらくまったく個人的な理由からけなしたりするのが当たり前になってしまっているのだろう。私たちのこの党派の時代にあって、私はこのようにこき下ろされる場合や似たような場合に備えてあらゆる衝突や誤解を避けるために、ともかくこのことを永久に忘れないようにするしかない。味方に付くべき党派はただひとつ、

^{訳注 13} アカデミー版の編者によると、おそらく、コッタから出版される予定だった『知識学の新叙述』を指すとのことである。Vgl. GA I/7, S. 399 Anm. 11.

^{訳注 14} 『ヤコービのフィヒテ宛書簡』、7-8 頁の注参照。Vgl. GA I/7, S. 399 Anm. 12.

才能と徹底性に与し愚かさや悪意と袂を分かつ党派である。このような党派に属すことを筆者はつねに願っている。

第7章 かの最高原則に基づくところの、我らが主人公のもっとそれ以上にほとんど信じられないもうひとつの自分自身についての意見

400

我らが主人公を見舞った災厄でほとんど説明が付かないことがもうひとつある。それは、むやみやたらと執筆したがる彼の同時代の多くの人間よりも紙幅を割いたのは彼だけであつたにもかかわらず、それでも彼は最期を迎えるまで執筆のし方を習得することはなかつた。彼の場合には一行に必ずと言っていいほど、語の不適切な使用がひとつから三つ、余計な単語が若干見られたのである。たとえば、彼の印刷物からいくつか書き写さねばならないという不幸な目に遭つた場合には、このことを最もはっきりと見てとることができた。この彼の物語の著者にはあらかじめわかつており、驚愕を禁じ得ないのだが、本書の後の方で述べるように、彼はどのみちこの避けられない運命に見舞われることだろう。おそらくその上ここで彼の主張に対する個々の論拠を挙げるようなことまで要求してくる冷酷な読者に対して、そのためには是非とも自分でニコライの書いたものを数頁書き写してくれるように敢えてお願いすることが彼にはできたのかも知れないが。

とは言え、彼の講演の全体は次のような性質のものであつた。彼がつねに心底気に掛けていたのは、読者に何とか彼の言っていることを完全に聞き取り、正しく理解してもらふことだつた。したがつて彼がつねに、一つ目の文を終えるとすぐに、あたかも何かまだ忘れていたことがあり、まだ十分に判明には語っていないかのような気がした。それゆえ彼は、忘れていたものがこころに浮かんで話に盛り込めないかどうか、また、今度は判明なかたちでもっとうまくいかないかどうか確かめようとして、二つ目の文を最初からもう一度やり直した。しかしながら今度の二つ目の文の場合も一つ目の文のときと同じようになる可能性がおそらくあるので、当然ながらまたもや三つ目の文で、そしてこの文を終えると四つ目の文でまた最初からもう一度やり直し、といったように、延々と

続くのであった。このようにして、彼は倦むことなく判明性と完成度の一層高い表現を求めたのである。そしてようやくそれでもとにかく終わりを迎えた場合には、というか、実際のところ最後にはやはりおしまいにしていたのだが、そういう場合には、ただたんに、他の重要な仕事があるのでそちらに戻らねばならず、今話しているテーマを完結させるのに必要な時間は残されていないからという理由で打ち切りになっていたのである。

401 当時の彼は機知を大いに愛好しており、彼の精神はもう早くから才気あふれる英国人たち、シャフツベリ^{訳注15}、バトラー^{訳注16}、スモレット^{訳注17}、『ジョン・バンクル』^{訳注18}の著者、等々のもとで糧を得ていた。それにもかかわらず、彼の最も輝かしい時代、すなわち、『グンディベルト』と機知に富んだ旅行書の時代まで、彼の冗談はきわめてねちっこく、平凡で、下品なところを留めていたのである。ニコライの機知には同時に彼の時代の論争好きな機知の最大の特徴が表れているので、もしかするとここでこの機知の手っ取り早い分類をすることは不適切ではないのかも知れ

^{訳注 15} 第3代シャフツベリ伯爵アントニー・アシュリー＝クーパー (Anthony Ashley-Cooper, 3rd Earl of Shaftesbury, 1671-1713) : イギリスのモラルセンス学派の哲学者。

^{訳注 16} サミュエル・バトラー (Samuel Butler, 1612-1680) : イギリスの詩人。代表作は、風刺詩『ヒューディブラス』(*Hudibras*, 1662)。

^{訳注 17} トバイアス・ジョージ・スモレット (Tobias George Smollett, 1721-1771) : イギリスの詩人、作家。代表作は、『ロデリック・ランダムの冒険』(*The Adventures of Roderick Random*, 1748), 『ハンフリー・クリンカーの遠征』(*The Expedition of Humphry Clinker*, 1771) など。

^{訳注 18} トーマス・エイモリー (Thomas Amory, ca. 1691-1788) 『ヨーハン・ブンケルの日々の観察記録と意見——さまざまな珍しい女性の生涯を添えて——』(*Leben Bemerkungen und Meinungen Johann Bunkels, nebst den Leben verschiedener merkwürdiger Frauenzimmer*, 4 Theile, Berlin 1778) のこと。英語からの翻訳で、ニコライによる補足的なコメントと意見が付されていた。英語の原著は『ジョン・バンクル殿の伝記——世界のいくつかの地域でのさまざまな観察記録と考察、および、たくさんの珍しい関係を含めて——』(*The Life of John Buncl, Esq; containing Various Observations and Reflections Made in several Parts of the World, and Many Extraordinary Relations*, 2 Bde., London 1756 and 1766)。

ない。

私たちはこの機知を三つに区分し、そこに完全な綜合を見いだす。一つ目は繰り返す機知である。市場で賤民のある男がほんやり突っ立っているすべての人だかりの前で、ある露天商の女に「おまえは泥棒だ」と言うと、その女は人だかりの方を向いて、歩を進めてこう言うのだ、「あたしが泥棒だってさ、この男が言ってるよ」と。これが機知の絶対的定立である。この種の機知を使って我々が主人公は敵たちに深手を負わせるのをつねにしていた。そして超越論哲学者の学派はただそれだけが原因で出血多量で死ぬのだそうだ。— 二つ目の機知は単純な報復である。あの男が「おまえは泥棒だ」という言葉を繰り返すと、今度は女が彼にこう答えるのだ、「ちがうわ、あんたよ、あんたが泥棒よ」と。これは機知の反定立だ。この種のものについても我々が主人公は見事に扱うすべを心得ており、頻繁に用いていた。最後に、三つ目の種類は皮肉たつぷりの報復である。我らのあの男が今一度彼の言葉を繰り返すと、露天商の女は彼にこう答えるのだ、「そうかい、あんた程度の男だったらそう言うだろうね。あたしゃつくづく、あんたの身の丈に合ってると思うよ」と。これが機知の綜合定立である。我々が主人公の名誉のために繰り返し言っておかねばならないが、彼は最後の辛辣な種類のものについては、これまた巧みに操るすべをわきまえていたにもかかわらず、きわめてまれに、非常に回復しがたいダメージを与えられたときの対抗策としてしか用いなかったのである。以上が彼の人のいじりの全容であり、他の種類ものは彼のあまたある著作群の中には見つからなかった。

真理にかんするニコライの文筆の才能は以上のようなものであった。

ところで、彼自身はこのような才能についてどう思っていたのだろうか。— この点についても公正に行こう。痛風と足指の痛みで引き裂かれるような思いをしている、年老いた出来損ないのファウヌスが、流れ過ぎていく小川に自分の姿が映っているのを見て、男らしく畏敬の念を感じさせると思ったからといって、だれが彼のことははなはだしく悪く取るというのだろうか。彼がそれを通して見ている目はやはりこれまた彼自身の一部なのだ。しかしながら、このファウヌスが自分の毛むくじゃらの顔に浮かんだ痛風がもたらす痙攣性の発作を絶世の美女ウエヌスの微笑みとみなし、彼の干からびた太ももがガタガタ震えていたり、

彼のやせこけた山羊の足が震えているのをグラツィアのひとりがダンスの練習をしているのだと思ったならば、これはやはり一介のファウヌスに許されうる自己愛の中庸を踏み越え過ぎていることになる。

我らが主人公がこのファウヌスよりはるかに良い状態にあるわけではなかった。彼が文章のスタイルの問題にかんする裁判官にして大家であると自認していたことは明らかで、一部には、彼がたとえば、文句なく彼の時代の最高の美文家のひとりであるヤコービに対して執筆ができない^{訳注19}と責めたときに、彼が他の文体に対して向けていた非難が証明しているし、一部には、彼がときおりまったくあからさまに自分自身の講演を慈しんでいたこともその証拠である。彼が言うには、ただたんに書物からしか学んでいない学識者たちは公衆に対して何かの講演を行うときにどのようなしなければならぬのかそのすべをまったく心得ていない。しかしながら世間で生きてきた人間である自分にはその心得があると言い、そして講演の巧みさを実際に示したのである^{原注(1)}。彼がどのような風刺的頭脳と狡猾さを持ち合わせていると自認していたのかは、次のことから見て取れる。彼は嘲笑によって愚かさを暴くというホラティウス—シャフツベリの格率^{訳注20}を我が物とし、最期を迎えるまで、嘲笑という、あの武器によってあらゆる愚かさを責め立てることが天分であり任務であると信じていたのである。このような意見は、外的な誘因が一切必要なく蓋然性をまったく欠いていたので、もっぱら我らが主人公がそもそも才能として持っている諸概念のみによって生じることができ

訳注 19 第6章の訳注8を参照。

訳注 20 クイントゥス・ホラティウス・フラックス (Quintus Horatius Flaccus, 65-8 BC) 『風刺詩』(Satires) 第1巻, 第10歌, 14-15行。「辛辣にやるよりも、嘲笑による方が、一般に、より力強くより効果的に大事を解決することができる (ridiculum acri forties et melius magnas plerumque secat res)」。『風刺詩』第1巻, 第1歌, 24-25行。「嘲笑を通して真実を告げることには何の妨げがあるのだろうか (ridentem dicere verum quid vetat?)」。シャフツベリ『熱狂にかんする*****閣下への書簡』(A Letter concerning Enthusiasm, to My Lord ***** London 1708)の「第二節」, 特に17頁を参照。「嘲笑のテスト(Test of Redicule)」(傍点イタリック)。シャフツベリの著作ではホラティウスの二番目の引用文をモットーとして掲げており、最初の引用文は20頁で小見出しとして使われている。Vgl. GA I/7, S. 402 Anm. 7.

たし、それらのみによって確固たるものとすることができたのだ。

原注

(1) ニコライの旅行記の非常にたくさんの箇所で見られる^{訳注21}。

(第8章以降は次号以降に続く)

^{訳注 21} 『ドイツ・スイス旅行記』第11巻 (Berlin u. Stettin 1796), 序文 (Vorrede) 参照。

